

JLTA Newsletter
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 11 発行代表者：大友 賢二 2001年(平成13年)11月22日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>



日本言語テスト学会 第5回大会 (2001年10月28日(日)) 報告

「言語教育と言語テストの接点」

— 浅野博先生 (東洋学園大学) 基調講演要旨 —

「言語教育と言語テストの接点」という主題のもと、「言語教育は存在するのか」「言語テストから『教育の評価』へ」「これからの英語教育」の大きく3つの観点から、具体的なわかりやすい事例とともに、論の展開がなされた。

「言語教育は存在するのか」に関しては、わが国においては「言語教育」というものが広く実践されてきたとは思われない。それは母語の乱れに如実に表れている。テレビやマスコミなどで使われている日本語などについても批判的にみる必要があるであろう。国語教育も英語教育も、ともに歴史は長い、両者が接近したことはほとんどない。最近、日本語教育が盛んになってきたが、英語教育はむしろ外国語として日本語を教えることを主眼とした日本語教育との連携が望まれる。また、こちらのほうが実現可能性も高いと思われる、といった主張がなされた。

つぎに「言語テストから『教育の評価』へ」に関しては、われわれ教員は、どうしてもテスト結果・成績と結びつけて卒業生を思い出したり、今教えている生徒を判断してしまう悪い癖がある。しかし、人間の価値は、テストの点数や学校の成績だけでは測れない、といった主張がなされた。講演者の具体的な生徒評価失敗の経験談として、高校教員時代の教え子で NHK アナウンサーを勤めて有名となった現・国連広報センター所長の高島肇久氏のことが紹介された。

最後の「これからの英語教育」に関しては、「英語教師がもっと議論をしよう」「何を目標に、どのように教えるのかを考えよう」「テスト・評価や授業についての意識を変えよう」といった反省のためのいくつかの提案がなされた。すなわち、「テストがないと勉強しない」、「テストの点がよければ英語力がある」、「授業は楽しいほどよい」、「発音や文法の間違ひは訂正しないほうがよい」、「評価には主観を入れるな」、などなどの前提は一度疑ってみる必要がある。

報告者：片桐一彦 (麗澤大学)

パネルディスカッション

Toward a JLTA Code of Testing Practice

司会：Randolph Thrasher (国際基督教大学)

発表者：Randolph Thrasher (国際基督教大学),
Steven Ross (関西学院大学), 小山由紀江
(長岡技術科大学), 渡部良典 (秋田大学)

バンクーバーで開催された LTRC 2000 において、国際言語テスト学会 (ILTA) は「言語テストにおける倫理規範」を採択し規定した。つづいて現在のところ、「言語テストの実施規範」についての議論がなされている。それを受けて日本における「言語テストの実施規範」規定についての議論がこのパネルディスカッションにておこなわれた。

まず、Steven Ross 氏より、日本でおこなわれている言語テストとそれを取り巻く状況の特殊性について指摘がなされた。社会的影響・責任が最も大きいと思われる大学入学試験に焦点を絞り、具体的に 18 点の多岐にわたる指摘がなされた。これらの状況を鑑みて、日本独自の「言語テストの実施規範」の規定が望まれるとの主張がなされた。

その発表を受けて、Randy Thrasher 氏より、具体的な「言語テストの実施規範」の原案が提出された。

つづいて、ディスカッサントの小山由紀江氏より、2 人の発言に対して賛成のコメントがいくつかなされた。米・欧・オーストラリアといった海外の「実施規範」とは違った、日本の実情に合った日本独自の「実施規範」が必要であること。また、現在、日本の多くの大学では、大学や学部や学科ごとにそれぞれの目的・到達目標・そのための具体的方法などを明確にしつつあり、今こそまさに「言語テストの実施規範」を設定すべき秋(とき)であること。などの主張がなされた。

そのつぎに、もう一人のディスカッサントである渡部良典氏より、大枠について賛成だが、いくつか修正したほうがよい箇所があるとのコメントがなされ、具体的にその箇所の指摘がいくつかなされた。その中で、Ross 氏と Thrasher 氏から提出されたものをトップ・ダウン式で進めていくより、ボトム・アップ式で「言語テストの実施規範」の作成を進めていく必要もあるのではないかとし、たとえば、言語テスト研究の専門家以外も含めた、いろいろな人から意見を最初に集める方法や、もしくは「言語テストの実施規範」の原案ができた段階で、それら多くの人にもそれに対する意見を求める方法などが提案された。

その後、フロアからの質問や意見なども活発に出され、この「言語テストの実施規範」作成は継続審議されることになった。

報告者：片桐一彦 (麗澤大学)

研究発表

Tomoko Fujita (Rikkyo University). Peer, Self- and Instructor Assessment in EFL Speech Classes: Relationships and Validity

A report was made on the research conducted with the presenter's first year EFL students on oral presentations. The purpose of the project was to examine the nature and relationship among peer, self-, and instructor evaluation of the oral presentations required in her courses. After a brief introduction she gave a summary of the published articles she had looked at in regard to the topic, then proceeded to outline her own study.

The presenter worked with a sample of 60 freshmen students of differing English language proficiency, showed them samples of the previous

year's student presentations via video, and offered a variety of topics from which the students could choose for their own presentations. The assessment schedule presented to students indicated that students would 1) spend the first week presenting to the class while being video-ed, 2) view themselves and others presenting so that they could evaluate one another during the second week, and then 3) receive their own scores along with the class average of others' scores and comments from both the other students and the instructor.

From these evaluations, the presenter was able to calculate correlations among the three various individual assessments, in addition to the inter-category assessments on the evaluation form. She then used Hotelling t-observed values to compare the difference between the individual's evaluation of themselves and their peers, and themselves and the instructor. The largest problem arose in the study because of the difference in group size between the number of students assessing an individual and the fact that there was only one instructor to which comparison could be made. She also indicated that she had factored the categories on the evaluation sheets in an attempt to reduce the number of items, but she did not have enough time to present the results in detail, except to say that the final decision based on the factorization was to retain all of the categories instead of reducing the number of specific areas of evaluation.

The final point that should be made in reporting this presentation is that the presenter herself demonstrated excellent oral presentation skills at the session and would have provided a good example for her students. She was organized, well-prepared, made appropriate eye contact, and was clearly familiar

with her material. The discussion she provided was stimulating and self-critical when necessary. All relevant details were provided and she competently responded to any questions at the end of the presentation.

Reporter: Elizabeth Heiser
(*Kansai Gaikokugo University*)

Tetsuhito Shizuka (*Institute of Foreign Language and Education Research, Kansai University*).
Feasibility of Using Learner-Perceived Sentence Difficulty as a Reading Ability

A report was presented on the feasibility of using learner-perceived sentence evaluations of difficulty as an indicator of reading ability. The thesis appeared to be "that depending upon the perceived difficulty of a reading sentence by a subject, one could determine the level of the student's reading ability." He suggested that a more straightforward manner of determining the reader's comprehension when being tested for reading ability would be to ask the testees. The presentation attempted to provide arguments suggesting the use of such subjective data as a basis of estimating reading proficiency.

The sample consisted of 430 Japanese EFL learners who were shown a set of 40 sentences. They were asked to classify them into one of five groups or levels of difficulty based on the individual's personal experience or English language ability. The data from these ratings were fitted into the Rasch scale model using facets. Data reliability was extremely high for such subjective input at .9582 (N = 371) for the 40 items. Inquiries concerning the base evaluation of the difficulty of the material by more objective means revealed that the 40 sentences

had been subjected to computer Flesch Reading Ease evaluations which presuppose input of a coherent nature, that is, paragraph structure and consistent content; criteria which the 40 independent sentences did not meet.

The findings were stated as 1) readability perception ratings produce high internal consistency, 2) subjectively perceived readability correlates significantly with the Flesch Reading Ease scores, and 3) ability measures derived from the readability perception of students correlates significantly with TOEFL and two other class performance measures, but the procedural problems with the project seem to undermine the conclusions. He stated at the beginning of the presentation that "certain conditions needed to be met" in order for the procedure to be useful. He concluded by commenting that for ability estimation the procedure needed to be used in situations where it was to the individuals advantage not to fake their ability, which seems to imply some students saw the evaluation task as a test of their own ability and attempted to over estimate their score at accurately evaluating the sentences, perhaps by stating difficult sentences were easier than they actually found them to be. This must have been a rather disappointing conclusion to have reached after such extensive work.

Reporter: Elizabeth Heiser
(*Kansai Gaikokugo University*)

片桐 一彦 (麗澤大学) 「日本人学習者用英語力簡易測定テストV : 中学生が受験した場合の妥当性の検証と今後の良案の提示」

本発表は、日本の中学、高校、大学で短時間に実施処理できる「英語能力簡易測定テスト」

の開発を目指す発表者が、自身の一連の研究における成果をまとめ、改善に向けた今後のテスト開発の指針を示したものである。発表者は、過去の研究で「頻度」を機軸にした望月 (1998) の語彙テストが、クラス編成などを目的とした日本人学習者の総合的英語能力の「簡易測定」において有効であることを実証し、ラッシュ分析を通じて優良項目を絞り込み、受験者集団に依存しない項目難易度を基準に、各 32 問の 3 版の平行テストを開発した。さらに、高校、大学において平行テストの有効性を検証し、今回の研究では中学生を対象に同様の調査を行った。その結果、テストの信頼性は、それほど高い値にならなかったものの問題数が少ないテストの性格上、許容される水準であると判断できたが、併存的妥当性の指標の中にはかなり低い値も見られ、当初期待された結果は必ずしも得られなかった。その一つの要因としてテスト難易度が受験者能力に充分に対応していなかった可能性があるとした。改善の指針として、より幅広い能力水準域に対応する 360 問のテストバンクを築くこと、それに基づき中高大で異なる難易度層の 60 項目のテストを 3 版ずつ作成し、中高一と高大のテスト間で 30 問の共通項目を含むものにするなど、より広範なテストシステムの開発が望まれ、そのためにより幅広い能力水準域サンプルからのデータ採取が必要であることを指摘した。質疑では、併存的妥当性の外部基準として使用したテストが外部基準として適切であったか等が問われたが、適切な外部基準となるデータがそろったサンプルを得ることはなかなか困難なようである。語彙テストは問題数の割に時間がかからず、多くの日本人受験者にとって、表面妥当性が高いように思える。今後のテスト開発の成果が楽しみである。

報告者：法月 健 (静岡産業大学)

島谷 浩 (熊本大学) 「英語コミュニケーション能力評価の波及効果と今後の方向性」

本発表は、① 1997 年度よりリスニング・テストを入試に導入した熊本大学で行われた入学者の英語学力調査、② 全国的な大学修学試験の中でリスニング・テストを実施している韓国と未だその状況に至っていない日本の高校生の英語力比較調査、③ リスニング・テストの高校での英語教育への影響に関する日本と韓国の英語教師へのアンケート調査に関する分析結果を報告したものである。① の調査では、毎年全学部の入学生の中から 300 名を抽出して実施している Pre-TOEFL の結果を、入試へのリスニング・テスト導入前年、実施開始年、実施 2 年目の 3 年間のデータで比較した。その結果、平均点や満点者数の数値からリスニング導入後、Pre-TOEFL リスニング下位テストの結果が向上する傾向は見られたが、文法、作文力、読解力、総合得点には顕著な落ち込みが見られた。② の調査では、日韓両国の高校生各約 300 名弱に英語聴解・読解力テストを実施した結果、高校 2、3 年生のグループともに総得点、聴解力、読解力のセクションのいずれにおいても韓国の高校生の得点が危険率 1% 以下水準の有意差で日本人学生のものを上回った。各セクションを問題種別に分けて結果を分析すると、3 年生の聴解セクション要点把握問題の成績を除いては、全種類の問題で韓国の高校生の得点が有意差を持って上回った。③ の調査では、総じて韓国(プサン)の教師はリスニング・テストを好意的にとらえ、全国試験への導入の意義を認識し、自身のリスニング指導の改善に努めている傾向が日本(熊本)の教師より強いことがわかった。

日本では 2006 年より大学入試センター試験にリスニング・テストが導入される予定だが、実施方法、形式、難易度、配点割合、情報開示などが良い波及効果を与えるように十分に検討し、教師個人、学校、英語教育団体も、コミュニケーション能力の養成に不可欠な適切な評価を確立するために協力体制を強化する必要があると論じた。

報告者：法月 健 (静岡産業大学)

村田美子 (関西外国語大学) 「ポートフォリオ・アセスメント」

この方法は米国の外国語教育において 10 年ほど前から注目されてきている。教育、学習の結果だけではなく、その過程なども評価の対象とするものであり、さらに教師のみならず学習者も評価に参加する。

評価に時間がかかる上、主観が入りやすいなどの欠点があるために、採点基準を記した表を作り、複数で採点を行うなどの工夫がなされている。

発表者は自身の Critical Thinking などを含む 4 つのクラスにおける実践例を紹介している。アンケート結果の示すところ、この方法が「好き」であるとした学生は 69% を占め、さらに「授業中、友人の意見が良く聞けた」との回答が 90% にのぼった。学習方法のわからない学生に学び方を学ばせ、学生と教師の信頼関係を深めるなどの点でも優れた方法である、と結論付けている。これからの発展が大いに期待される。

報告者：清川英男 (和洋女子大学)

Information on Language Testing Research

Information on Language Testing Research の欄では、言語テスト研究に関連する情報を随時掲載してまいります。掲載希望は、JLTA 事務局までご連絡下さい。

日本語テスト学会 第14回研究例会のご案内

日時：2001年12月8日(土) 15:00~17:30
場所：東京経済大学(6号館7階中会議室3)
(〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34)
14:30~受付
(*事前申し込み不要。参加費：会員 無料・一般 1,000円。)
15:00~16:10 発表I: Jeff Hubbell (法政大学)
Validation in Language Testing and Teaching - a long and winding road.
16:10~16:20 休憩
16:20~17:30 発表II: 卯城 祐司 (筑波大学)
「英文読解における Schema Modification Test の開発」

日本語教育学会主催

「言語教育国際シンポジウム」のご案内

主題：「コミュニケーションに関わる言語能力(仮題)」
パネリスト：
ライル・F・バックマン教授(UCLA), 日本語教育学会・大学英語教育学会・日本語テスト学会より各1名
開催日：平成14年3月21日(木曜日, 春分の日)
1時~4時
会場：学術総合センター(東京都千代田区一ツ橋)
主催：社団法人 日本語教育学会(会長：西原 鈴子)
参加料：JLTA 会員は1,000円

なお、続いて3月23日(土)にバックマン教授(UCLA)の講演会、24日(日)にバックマン教授によるワークショップが予定されており、JLTA 会員は主催団体会員と同額の参加料にて参加できます。
詳細な最新情報については日本語教育学会のウェブサイト http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/ をご覧下さい。

NEW ETS' GLOBAL INSTITUTE COURSE
Design and Development of Language Assessments
January 28-30 & June 17-19, 2002

ETS' Global Institute training course the Design and Development of Language Assessments will provide you with the technical resources you need to development and administration of your own language testing program according to your assessment needs. The course covers procedures followed in the establishment and management of second or foreign language assessments, and features discussions centered on the latest research in the area of language testing and applied technology.

For more information, please visit ETS' web site at http://www.ets.org/etsglobal/newcourse.html.

学 会 短 信

1. 住所・所属等の訂正・変更

名簿の訂正、あるいは住所・所属・メールアドレス等の変更が必要となった会員は、正しい、あるいは新しい住所・所属を、事務局までご連絡下さい。

2. 会費の納入について

郵便振込みをご利用の方で、2001年度の会費を未納の方は、今回同封された用紙を使用して、至急払い込み下さい。なお、銀行口座からの引き落としをご利用の方で、銀行の合併・吸収等により、銀行名あるいは口座番号等の変更がある場合には、大至急事務局までお知らせ下さい。

3. その他

JLTA の活動に対するご意見やご要望、Newsletter 等への掲載希望記事などがありましたら、事務局までお申し付け下さい。より充実した活動ができるよう、皆様のご協力を、よろしくお願いいたします。

日本語テスト学会事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758
TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp
URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

